

青年心理学からみたキャリア教育

Adolescent psychology and career education

椋山女学園大学看護学部教授

後藤 宗理

Motomichi Goto

- 1 青年期の特徴と課題
- 2 キャリア発達モデルの紹介
- 3 統計資料に基づく青年の状況
- 4 青年心理学の視点からみた現代のキャリア教育

1 青年期の特徴と課題

青年期はどのような時期か。思春期発達がひとつの手がかりになる。12,13歳からはじまり、従来は就職、結婚をひとつの手がかりとして22,23歳までと考えていたが、現在では年齢的には思春期発達が10歳あたりからみられるということと、就職年齢、結婚年齢が先に伸びたこと、あるいは就職も結婚もしない人も増えたことで、青年期の延長が話題になっている。その結果、青年期というものを20歳まででひと区切りにして、その後成人準備期あるいは、若者というように時期を分けて整理し直すという考え方もある。

そもそも青年期とはどのような時期だったかと考えると、身体的生理的には子どものからだから大人のからだへ変化する時期、社会的には子どもでもなく大人でもない時期、心理的には子どもから自立した大人への時期というように考えることができる。青年心理学の理論的な枠組みとして、青年期を「疾風怒濤」の時期ととらえていた時期が長い。これはHall,G.S.が、要するに青年期にはいろいろな

問題が起きてワケが分からない混乱の時期を、文明がまだ開けていない地球から、現在の地球が出来上がっていくまでの時期に例えて「疾風怒濤」ということばで表現したことによる。その他の学者はこの青年期を、例えばErikson,E.H.は「アイデンティティ」という言葉で説明した。彼によれば、青年期とはもう一度自分を見つめ直して、「私はこのような人間だ」と定義付ける時期である。また、Piaget,J.は形式的操作段階として論理的で抽象的な思考ができる時期だと特徴付けている。そのほかの学者としてはLewin,K.がいる。Lewinは、青年は子どもでもなく大人でもない周辺においやられているという意味で、青年期を周辺人と特徴付けている。

1) Erikson の考え方

老年期	統合 対 絶望
成人期	生殖性(世代性) 対 停滞
成人前期	親密性 対 孤立
青年期	同一性の確立 対 同一性の拡散
児童期	勤勉性 対 劣等感
幼児後期	積極性 対 罪悪感
幼児前期	自律 対 恥、疑惑
乳児期	基本的信頼感の形成 対 不信

図1 人生の各段階における課題(Erikson,E.H.)

Erikson の枠組みを、【図1】に基づいて考えてみる。

人間の一生を乳児期から順々に上がっていくように整理し直してみると、青年期はちょうど真ん中に位置付けられて、同一性(アイデ

ンティティ)の確立が青年期の重要課題であるといえる。では、これは青年期だけの問題かというと、実は乳児期から、まず生まれた子どもが「基本的信頼感の形成」するということがベースにあって、次の時期には自分が自分の行動をコントロールする。さらに積極的にいろいろなことを試みて、次に児童期では努力するということを課題として取り上げている。さらに青年期に続く成人前期には、その自分というものがはっきりしたら他の人と親しく付き合えというように、付き合うことを課題としている。そこがうまくいかないと孤立という結果になると Erikson は言っている。そして、成人期に入ると世代性(生殖性)という、次の世代の世話をするという課題がある。自分の人生だけではなく、次の世代をどう育てるかというのが成人期の課題となる。老年期になると、全ての人がこれまでの自分の人生を振り返って満足した人生だったとまとめあげるか、それとも何てひどい人生だったんだと嘆くかというのがここでの課題になる。

駆け足で大雑把に説明すると、ひとつひとつは積上げられてきている課題で、乳児期の基本的信頼感の形成という課題は実はずっと続いている。平たい言葉で言えば、みんなに可愛いがられている、みんなに受け入れられている、自分もみんなもこの信頼のおける居場所の中で生活しているという実感を持っていることが、幼児期、児童期、青年期で順々に課題を解決していく時には大切だというように理解することができる。したがって乳児期が全てではないが、どの時期を通じてもここに自分の居場所があるというのは非常に重要なことである。

2) 焦点理論

最近の青年心理学の枠組みでは、人間が毎日どのような環境の中で生活しているかということに注目している。また、Coleman, J. の焦点理論も最近注目されている。つまりひとつひとつの課題を順々に注目していく方が理解しやすい、しかも、それは子どもから大人への移行ということを中心に理解した方がわかりやすく、「疾風怒濤」というようなゴチャゴチャしたようなワケ分らない時期ではなくて、よく見てみると青年期というのは大人の側の見方ではなくて、青年自身が今はこれをやらなくてはいけない、今はこれを解決すべきだということをよく知っていて、そして自分なりにそこで問題を解決している、というように考えるほうが考えやすい、という。

3) 青年期の具体的な課題

青年期の課題を整理すると、年齢とともに質が変わるような課題、時代とともに変化する課題、そして個人個人が持っている課題と3種類あるのではないかと考えている。

例えば、年齢とともに変化する課題としては身体の変化とジェンダーがある。子どもの頃は自分のからだだが、からだの大きさや外から見て背が大きい、小さいとか太っている、痩せているとかということは分かるが、子どものからだから大人のからだに変わってゆくということはあまり意識されていない。その思春期発育の時期には、女性の場合であれば生理が始まる、そのことをどう受け止めるか、女性あるいは男性としてこの時期のからだの変化を受け止めるかという課題、あるいは社会的にどのように自分は生きていけばよいのかを考える課題が年齢と共に現れてくる。論理的な思考能力が発達してくると、自分はどのように生きたらいいのかとか、今、社会はどう

なっているのかとか、政治だとか社会、そういうものに対してアンテナを張り、自分なりに考えを持つようになる。こういうことも年齢と共に現れてくる。こういうことは Piaget の考え方と絡んで抽象的なあるいは論理的な思考能力の発達と関係しているが、これも年齢に関係した課題である。

また自己概念の問題、自分とは何かという問題を考えていく時に、例えば「私は～」という言葉ではじまる文章を20個作る課題を与えられたことがあると思う。これを中学生にやらせると「私は背が高い」「私は明るい」とか「私はアイスクリームが食べたい」とそのような事を書いていくが、15個あたりまでで止まってなかなか20個書けない。それでも時間をかけて無理矢理書かせたものを整理したものがある。すると、中学生の頃は外見や体の特徴がよく出てくるが、年齢と共に自分の考えていることや性格などに目が向くようになってくる。それが青年期のひとつの特徴である。その中には、「私は○になりたい」だとか「私は○で悩んでいる」ということも出てくる。このようなものが年齢とともに変わってくる課題である。

つぎに時代と共に変化する課題として、職業的自己概念の発達がある。職業人として自分は何に向いているのかとか、どんな職業に就きたいと思っているのか、子どもの頃は確かにドラマの主人公やアニメの主人公のようなものになりたいと思っているのが、だんだんと自分なりに特徴を見つけ、あるいは自分の能力から現実的にはこれは無理だなというようなものをいろいろ取捨選択して、自分としてはこういうものになりたいというようなことを考えていくようになる。これも時代と共に

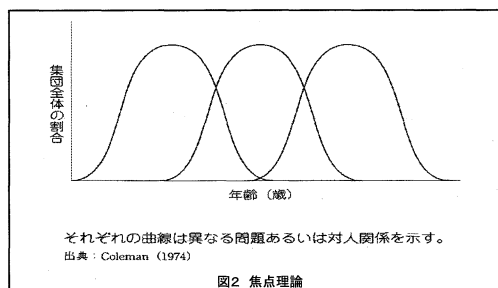
に職業的自己概念というものは恐らく変わっていくだろう。そもそも学校で学習をするということ自体が時代と共に変わってきた。50年前中学校を出て就職する人が最も多くて、それから時代が進んだところで、高等学校への進学がかなり増えてきたという時代背景の変化がある。その変化の中で青年のあり方、将来を見通すあり方というのが変わってくるだろうと思う。もうひとつ青年が社会に目を向けるかどうか、政治などにどのように関心を持つかというのも時代と共に大きく変わるのではないかと思う。筆者はかつて青年期の社会的態度に関する縦断研究にかかわったが、研究の過程で、中学生・高校生が政治的なものに関心を持たなくなっていることを指摘した。つまり、その政治的無関心とか私生活主義という自分の生活を大切にするタイプが明らかに多くなってきたのではないかと指摘したことがある。こういう社会の動きに連動したようなものも、例えば青年期の社会科教育とか政治に対する考え方の教育などで取り上げられることは、時代と共に変化する課題だろうと思う。

個別に抱える課題として取り上げたのは、特に親との関係である。上述の「疾風怒濤」が青年期の課題であるのは、親子の対立の問題と関係している。親は子どもが急に口を利かなくなったり、口数が少なくて不機嫌そうにしていたり、何も言ってくれないと思っている。子どもの方はそろそろ自分は大人になってきているので口を挟まないでほしい、友達とどこかに行きたい、いつまでも親がうるさく聞いてくると感じている。こういう関係を表現して「疾風怒濤」と言っていた。しかし、最近では、そういう対立する親子関係だけでは

なくて、母と娘が友達親子というような親子関係も話題になっている。そういうことから、それぞれの家にいろいろな事情があり、子どもは親と一緒にいれば、あるいは自分の家にいれば居心地がいいと考える家庭もあるし、早く逃げ出したいとしょうがないという家庭もあり、それは個別の問題として考えたほうが分かりやすいのかもしれない。それから友人関係や異性関係もかなり共通して何かが説明できるというよりは個別の問題かと思う。大人になる準備もそれぞれの人が二十歳あるいは大学を卒業するまでにどのような問題を解決しているかによって、大人になる準備ができていない人とできていない人がいると思う。個々に青年期ではとりあえず使うとしても、同時にこうだとは説明できなくて、大人への移行問題としてまとめることができるのではないか。

4) 学校から職場や社会への移行

ここでは1つの課題として学校から職場・社会への移行の問題を取り上げたい。時代の変化、地域の抱える課題を総合的に検討して、キャリア教育の考え方を示したい。その時に、Coleman の「焦点モデル」の「今、この時期に何をすべきか」ということを中心に考えることにする。特に学校から社会への移行ということを中心を考えるモデルで考えるとよいと思う。【図2】が Coleman のモデルである。



それぞれの曲線は異なる問題あるいは対人関係を表すもので、大多数の人はある年齢の時にこの問題は一番重要だと思っているけれども、もう少し年齢が上がると次の問題が挙がり、次も・・・というような、言ってみれば一難去ってまた一難というのが青年期だといえる。Hall はどちらかということこれらが一度にやってきて、てんやわんやになるのが青年期だと考えたが、Coleman はそうではなく比較的順調に推移すると考えた。

5) 青年期と世代

我々団塊世代はとくにかく人数が多いのが特徴である。人数が多いので、ある部分競争原理でいかなければしょうがないということもあったが、仲間意識というか、例えば筆者が卒業した中学校の生徒手帳には「ひとりでみんなのことを考え、みんなでひとりのことを考える」という言葉が出てくる。これは恐らく創立直後に先生方で考えたのだと思うが、今もずっと自分の頭の中に残っていることばである。また団塊世代の特徴として、地域格差に起源するキャリア格差というのがあるということも最近知った。大都市と東北地方などでは特に格差が大きく、ちょうど昭和23年生まれの筆者と同年の中学生を対象として、下北半島の青年を追跡調査した東北大学の研究がある。その研究について岩手県立大学の細江達郎先生が参加された調査報告が、2008年に東北大学で行われた日本キャリア教育学会での講演でとりあげられた。その研究では昭和23年生まれの人をずっと追跡していて、その方々が還暦になったのを機に研究をまとめたとのことであった。当時、下北半島のある中学校からはひとりも高等学校へ進学していない、全員が東京やどこかへ働きに出た。東京へ行

けば何とかなる、いいことがあるぞと言われて来てみたら、とんでもない学歴社会だった。その後の人生がもうガタガタだったという調査結果がインタビュー調査結果に出ていた。

団塊の世代はどこでも人数が多くて筆者が卒業した中学校も同級生が990人いた。しかもその990人の9割ぐらいは高校へ行き、クラスのかかなりの数が、その後も短大や大学へ進学した。ところが、東北地方の中学校では、誰も高等学校へ行かなかったという格差がある。それが団塊の世代のひとつの特徴かもしれない。また高校卒業後の状況にも関係したという。つまり、それまでとは状況が違って大学を出たからといって展望が開けるわけではないことがみえてきた。このことが大学紛争にも繋がっていったのではないと思う。我々の親の世代は大学を出ればエリートだという見通しを持っていて、恐らく大学へ行けといったのだろう。とにかく非常にたくさんの青年が高校や大学へ行った。

2 キャリア発達モデルの紹介

このようにひとつの社会現象の中で青年は過ごすわけだが、キャリア発達についての基礎的知識として、Super, D.E. の「職業的自己概念発達モデル」という古典的かつ有名なモデルと、Astin, A.W. の「I-P-Oモデル」をみておきたい。これは大学生活を経験して、その結果として何か資格を得るなり就職するというモデルである。我々も大学生活を職業社会化過程として考えてみようとした(若林、後藤、鹿内、1983)。このきっかけとなったのは、保育系短期大学という特化した短大へ学生が入ってくるというその動機は何か、卒業するときに専門職にならない学生もいるのではな

いか、その心理的な変化はどうか、ということであった。

Super は【図3】のように、子どもの頃は空

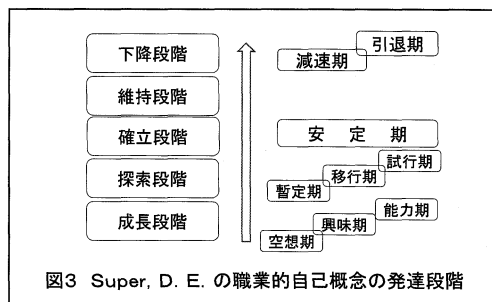


図3 Super, D. E. の職業的自己概念の発達段階

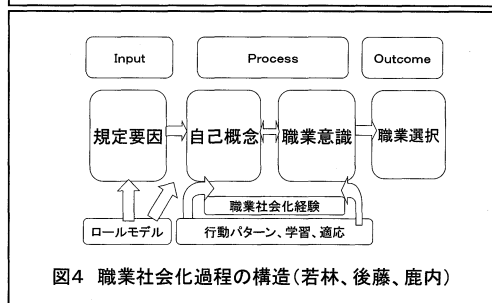


図4 職業社会化過程の構造(若林、後藤、鹿内)

想的な職業に興味を持ったり、自分の興味に従って自分のなりたいものを考えるが、次第に自分の能力などに関連づけて職業の探索をして、そして実際に職業に就いてみてそれからその職業生活に入っていくという流れがある。このうちの探索段階が青年期に当たる。職業社会化の構造について我々が考えたのは【図4】、インプットとして規定要因と在学中に自己概念と職業意識がどのように変わっていくのか、その結果として職業選択はどのようなことになるかということ。それと合わせて大学での学習や生活への適応というものがどう影響するかということを明らかにする目的で、研究を重ねた。内容的には1980年代のもので古いことを断わっておきたい。この構造に加えて、ロールモデルというのが非常に重要なのではないかと考えている。そのロールモデルは規定要因である入学前までの場合も

そうだが、在学中もロールモデルが影響していくと考えられる。

ここで規定要因というのは、例えば、どのような大学に入ったか、どういう学部を専攻したか、家庭の社会的・経済的背景や両親の教育水準や職業、それから個人の心理的・生理的要因、ライフヒストリーと呼ばれているものである。それが大学教育の入口にあたる。

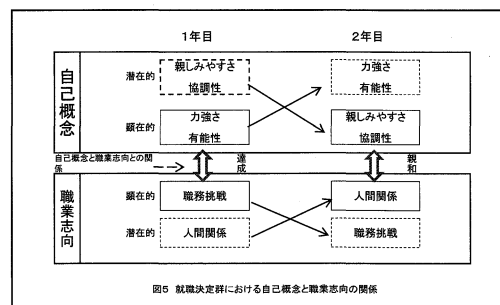
自己概念として取り上げているのは男らしさ、女らしさ、職業としてすすめていく上で自分はどういうところが優れているか、自信があるかということである。例えば、いろいろアイディアを出せるとか人間関係を上手くやれとか、確実に仕事をこなす自信がある、ということである。職業自己像というのは、バリバリ仕事をするタイプなのか、親しみやすさを出して仕事をするタイプなのかという尺度で判定している。社会的役割態度としては、平等主義的な役割態度を調べている。

職業意識は、職業志向という仕事の上で求めるものを調べている。やりがいを求める人、人間関係が大切だと思っている人、休みや厚生施設が整っているところという労働条件を求める人などのちがいを調べている。職業興味としては、当時のいろいろな職業のどの側面に興味があるのかということ調べた。

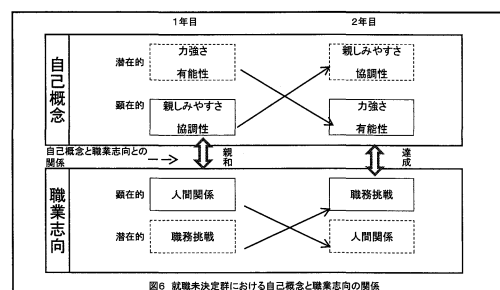
この2つのものが絡み合って、大学教育の出口として資格が取れたり、進路選択や職業選択をするのだらうと考えた。

具体的には短大生の職業社会化過程を調べた。ここでは自己概念と職業志向との関連を保育系と人文系の1年次から2年次にどう変化するか、特に2年次の終わりに就職先が決定しているグループとしていないグループでの比較をやってみた。これは20数年前のも

のだが、このような経過を分析した研究はあまりないと思う。結果によると、自己概念の低位要因として力強さを選びバリバリやるという人は、仕事の上でチャレンジする機会があるといいと思っている、それを「達成のモチーフ」と呼んだ。一方、自分は親しみやすい人柄でみんなと仲良くするのが優れていると思っていて、人間関係を重要視するタイプを「親和モチーフ」と呼んだ。そして、この2つが就職の決定・未決定にどう絡んでいるかを1年次から2年次にかけてみていった。



【図5】から明らかなように、1年目に達成のモチーフの人は就職決定しやすく、親和モチーフに基づいて職業選択をやりようとしている人は未決定となった。1年目から2年目の変化に注目すると就職決定群というのは1年目が達成のモチーフで、実際に結果の出た2年目には達成のモチーフが親和のモチーフに変わる。【図6】から未決定群は1年目が親和モチーフ、2年目になると遅まきながら達成モチーフにチェンジするというのが分かった。



その他にキャリア発達と職業自己像という研究で、勤続年数別に専門職の職業自己イメージを求めて学生の結果と比較したものを見おきたい。

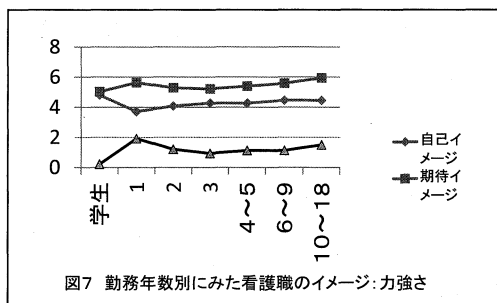


図7 勤務年数別にみた看護職のイメージ: 力強さ

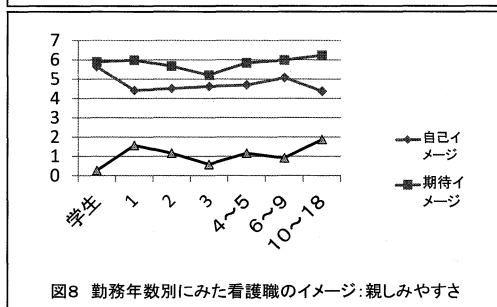


図8 勤務年数別にみた看護職のイメージ: 親しみやすさ

【図7, 8】から明らかなように学生に比べると、経験1年目での職業自己イメージでの期待像と自己像の差が大きくなって、いわゆるリアリティーショックが出てきている。看護職の方々に自分のイメージを尋ねてみると、1年目の人は自己イメージが下がって、だんだんと上がってくる。期待イメージは1年目で上がって横ばいというもので、学生は期待イメージと自己イメージで差はないが、1年目ではその差が大きくなって、経験を積むにつれてその差は小さくなっていく。つまり1年目にこんなはずじゃなかったのに、というのが力強さに現れてくる。親しみやすさについてもやはりこんなはずじゃなかったというのが結果に出ている。保育職も同じような傾向があり、学生の時に思っていたことに比べると、その後1-2年目では話が違っていた

ということが、力強さについても出てくる。

3 統計資料に基づく青年の状況

統計資料に基づく青年の状況を見ていきたいと思う。【図9】に基づいて出生数を比較したい。自分が生まれた時と、今年の入学生を比べるとかなり出生数が違うことがわかる。先程紹介した調査はマークした年代で、この人たちは、学生たちの親の世代である。

いろいろなデータに基づいて話を進めたい。昭和45年の時点で、高等教育機関に在籍していた人は同年代の全体の約2割だが、それがいまや8割近くの人が高等教育機関に在籍している。こういう中で、人数はもちろん減ってきているが、高等教育を修了した就職者がかなり増えてきていることは頭に置いておくべきである。若年者の失業率や非正規雇用率の推移で、どんどん失業率が上がってきているとか、このような数値が年齢と共に増えていて、この点からも若年者の失業率と非正規雇用率が増加しているということがいえる。また正規職員があまり増えずに非正規職員やフリーターがかなり増えてきていて、若年無業者はあまり変わってきていない。具体的には無業者60万人、フリーター178万人という数値が出ている。また、「七五三現象」ということばが知られるようになったが、卒業後3年以内の離職率が、中卒で7割、高卒で5割、大卒で3割になっている。

高等学校の卒業者はかつては就職する人が多かったが、今は大学へ進学する人が多く、それも普通科に限らず、専門学科でもかなりの者が進学している。高等学校への進学率は急上昇しているが、普通科に通う生徒の割合が非常に多くて、専門学科や総合学科に通う人

の割合が減ってきているのも今の特徴である。【図10】に基づいて18歳人口の分布を見ると18歳人口は減ってきているが、大学等進学者が増えてきている。以前ならば大学進学ではなくて、就職していた人たちが大学へきているのである。そういう中で、大学生の3分の1は職業については何も考えていない状況があり、これらを合わせてキャリア教育が非常に重要になってきたといえる。

また、最近、3.11 東日本大震災のあと気になったので大学進学率のデータを見ると、全国平均49%、愛知県50%に対して、東北地方は30%台だった。宮城県は東北大学などがあるが高いが、岩手や青森などはかなり低い。同様のことは沖縄や鹿児島、宮崎についてもいえる。いずれも30%台で、我々が中部地区にいて周囲の皆が大学へ行くという発想でものを考えていると、実は日本社会は昔ながらの、我々が青年期だった頃と変わらないという地域格差が今に残っていることを忘れてはいけないだろう。

4 青年心理学の視点からみた現代のキャリア教育

「焦点理論」から大学生のあり方を考えると、すでに述べたように90%以上の中学生が高校へ行き、高校普通科に7割、専門学科へ3割として、そこから大学への進学率も50%前後となっている。それから入試の多様化も進んでいる。このことから多くの青年にとって大学入試が当面の課題になり、青年期に解決すべきいろいろな課題が先送りにされていて、青年自身があまり鍛えられていないのではないかという問題点が指摘される。一方で、日本の青年は自尊感情が低いということも言われ

ており、自信がない青年をどう育てるかが課題になっている。これらの問題をどうするかというのが大学でのキャリア教育の一つの問題と思っている。これまでのハードルが低い分だけ、これからの試練が大変だと思う。そこで、一例として体験型学習で自分について考えさせるということを大学教育のなかに取り入れてみてはどうかと考えて、キャリアデザインという考えを取り入れてみた。

前任校での経験を生かして、椋山女学園大学での試み、就業力支援事業というGPについて取り上げたい。キャリア教育の位置づけは1年次、2年次でのキャリア導入教育という趣旨であり、全ての学部が受ける共通教養科目のキャリアデザイン科目である。

「私の履歴書」というものを今年からやるようにした。ここで振り返りをして、それから保育園や幼稚園の展覧会を見学し、就業力GPとどこかで接点ができないかと考えた。【図11】は2011年1月に発表された中教審答申に出てくるモデルだが、要するに学生たちは大学へ入ってくるまでに将来にわたる基礎的な能力を身につけているということ、そしてもうひとつ、それぞれの大学の中での専門的な知識や技能を身に付けさせるわけだが、その間に特に人間関係形成能力や自己理解力などをいろいろな形で身につけさせるような、そういう仕掛けを作っていくことが大切ではないかと思う。それが将来に向かって生きる力として伸びていくのではないかという考えのもとに計画している。

キャリア準備教育として1年次に「私の履歴書」を学生に書かせた。これを書かせるための交換条件としてまず自分の生い立ちをパワーポイントで60分、子どもの頃の写真も含め

て授業の最初に行った。またキャリアデザインを意識しながら、ゲストスピーカーに講演をお願いした。さらに昨年は生活科学部と国際コミュニケーション学部 of 学生に科目のオプションとして保育園見学を実施した。それから公立幼稚園の展覧会にも行った。こういうことを通じて次世代育成支援というものをやっていくということも意義があるのではないかと考えている。専門教育を受けるというのは少し違った角度から自分の生き方を考える機会になっているのではないかと考えている。

文献

中央教育審議会 2011 今後の学校における
キャリア教育・職業教育の在り方について
(答申)

コールマン、J. & ヘンドリー、L. / 白井利
明他(訳) 2003 青年期の本質 ミネルヴ

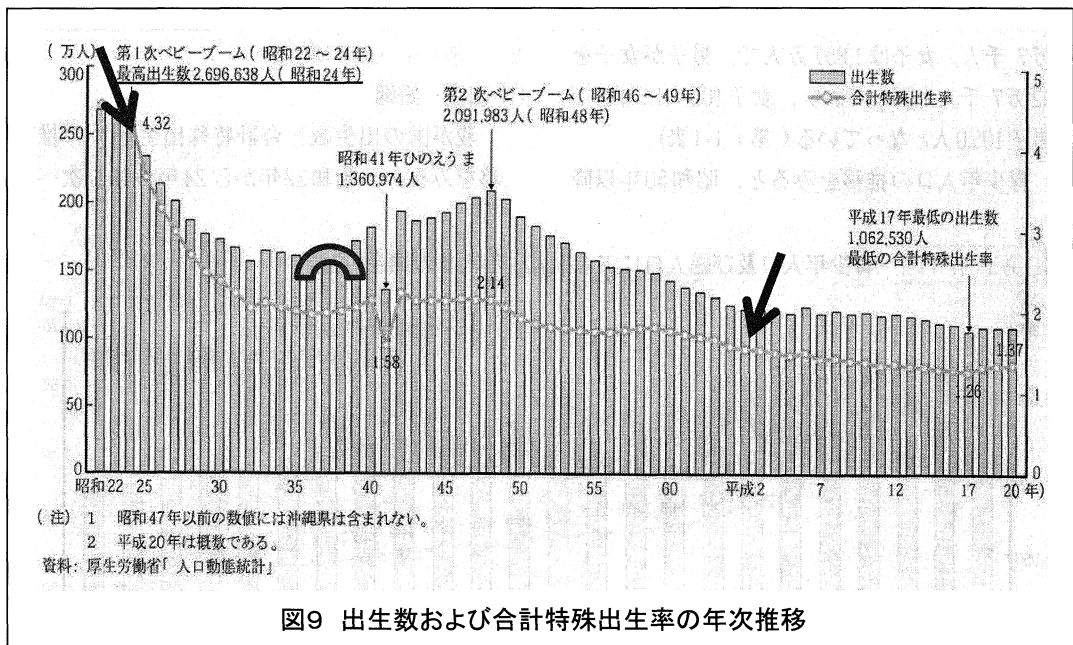
ア書房

文部科学省 2010 平成 21 年度 文部科学
白書：我が国の教育水準と教育費 佐伯印
刷

若林満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レ
ディネスと職業選択の構造－保育系、看護
系、人文系女子短大生における自己概念と
職業意識との関連－ 名古屋大学教育学部
紀要 (教育心理学科)、30、63～98

若林満・後藤宗理・鹿内啓子 1984 女子大
生における職業選択過程の予測的研究(I)
－就職決定群と未決定群の比較をもとに－
名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、
31、123～161

若林満・鹿内啓子・後藤宗理 1982 キャリ
ア発達と職業自己像－女性専門職の場合－
名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、
29、137～155



18歳人口の分布図の推移(推計)

昭和40年から平成21年にかけて、18歳人口のうち、高等学校卒業者の割合は約6割から9割超に増加。また、後期中等教育修了後に進学する者の割合は約15%から60%超に増加

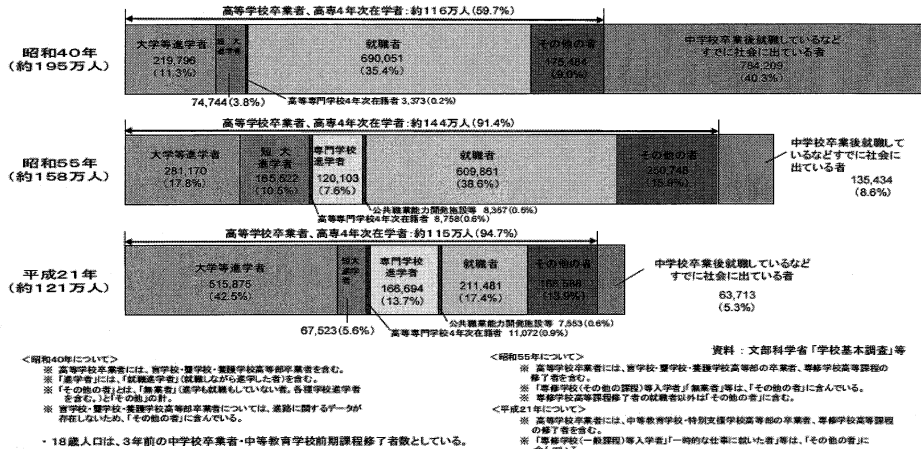
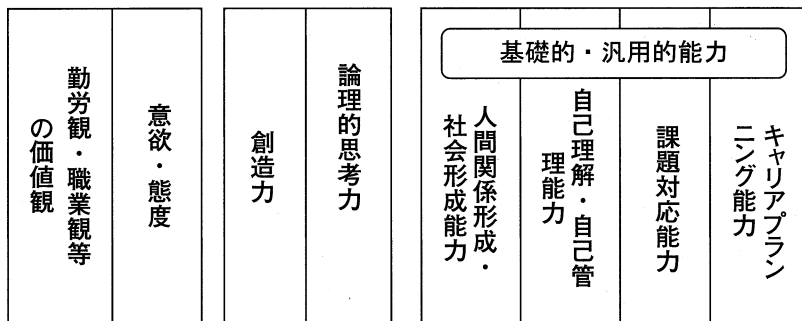


図10 18歳人口の分布図の推移(推計)

専門的な知識・技能



基礎的・基本的な知識・技能

図11 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素